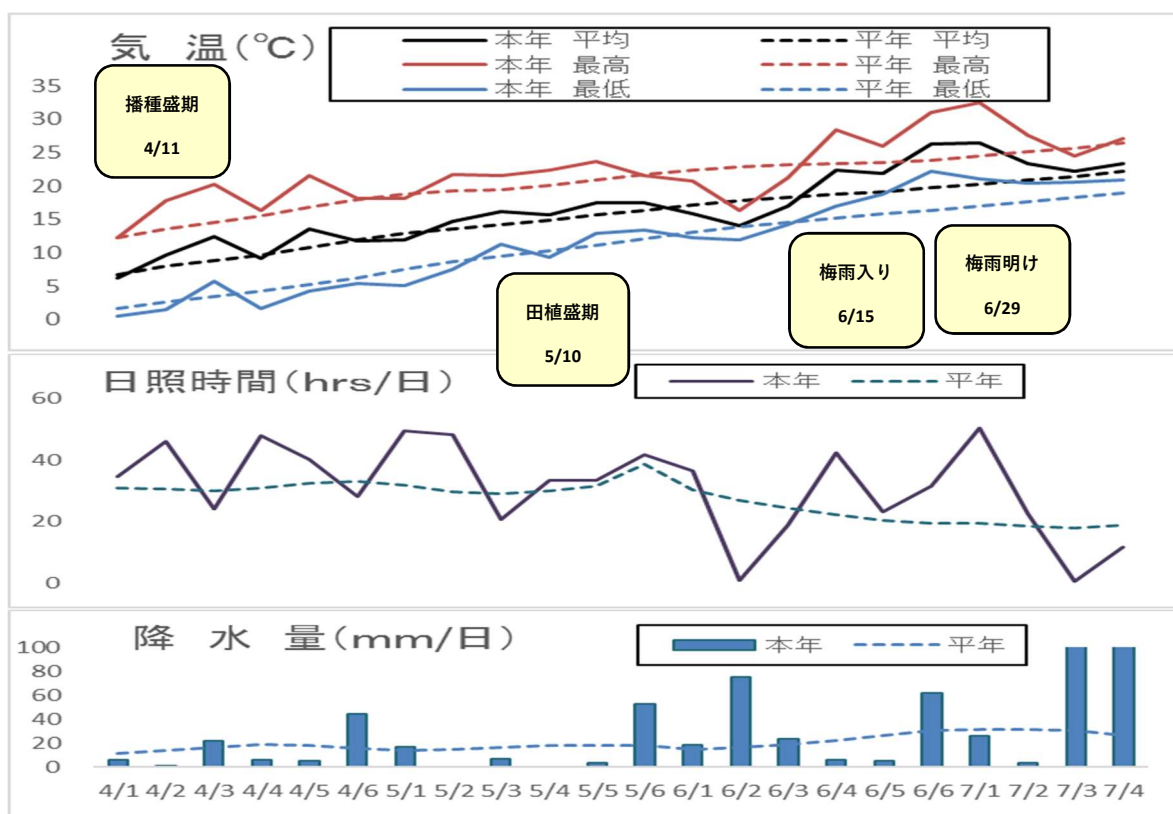


～平坦地帯の「ひとめぼれ」等は、減数分裂期に入る見込み～

～適期の追肥・水管理・病虫害防除に努める～

1 令和4年の気象（古川アメダス）



◆7/21 発表 東北地方の1か月予報(7/23～8/22までの天候見通し)【気象庁ホームページより】

- ・東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べ晴れの日が多い。
- ・向こう1か月の気温は、高い確率50%、平年並みの確率30%、低い確率20%。
- ・降水量は、多い若しくは平年並みの確率30%、少ない確率40%。
- ・日照時間は、多い若しくは平年並みの確率40%、少ない確率20%。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）				
気温	東北地方	向こう 1 か月 07/23～08/22	20 30 50	
		1 週目 07/23～07/29	20 30 50	
		2 週目 07/30～08/05	20 30 50	
		3 ～ 4 週目 08/06～08/19	20 40 40	
降水量	東北地方	向こう 1 か月 07/23～08/22	40 30 30	
日照時間	東北地方	向こう 1 か月 07/23～08/22	20 40 40	
			■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)	

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

2 生育状況【令和4年度 宮城県米づくり推進本部情報 第1号より一部抜粋】

(1) 生育調査は「ひとめぼれ」生育状況 (6/1～7/11, 下図)

- ・草丈 (左上) は6月上旬の低温で一時停滞したが、7月11日現在は平年より長めである。
- ・茎数 (右上) は6月上旬の低温で分げつの増加が遅れたが、7月11日現在は概ね平年並みである。
- ・葉数 (左下) も低温の影響で一時停滞したが、7月11日現在は概ね平年並みである。
- ・葉色 (右下) は7月11日現在、平年より若干低下している。

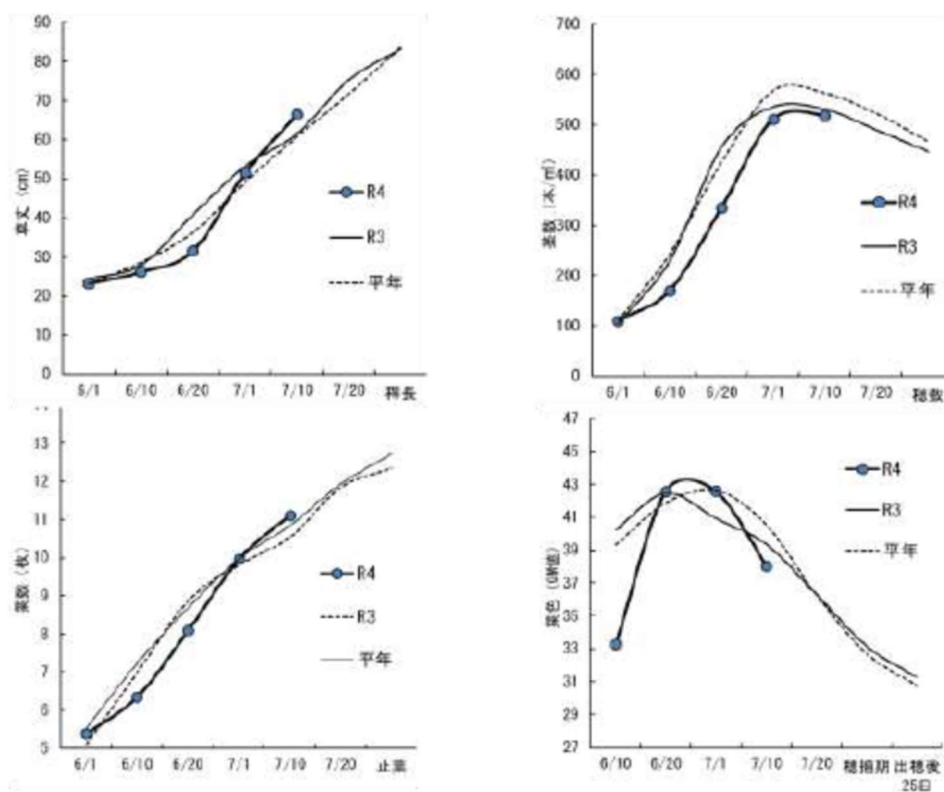


図1 生育調査は「ひとめぼれ」生育状況(左上:草丈, 右上:茎数, 左下:葉数, 右下:葉色)
※平年値は直近5か年(平成29年～令和3年)の平均値

(2) 【参考】幼穂の生育状況 (7月19日現在, A農協生育調査結果より)

- ・ひとめぼれ: 0.3～15mm (移植日: 5/4～5/20)
- ・ササニシキ: 0.5～13.5mm (移植日: 5/1～5/20)
- ・だて正夢: 3～6mm (移植日: 5/6～5/8)
- ・つや姫: 0.1～0.3mm (移植日: 5/8～5/19)
- ・金のいぶき: 0.5mm (移植日: 5/5)

(3) 出穂予想

- ・今後の天候が平年並みで推移すると仮定すると、「ひとめぼれ」等の中生品種の出穂期は、概ね平年並みの8月1日～11日(出穂最盛期は8月5日頃)と見込まれる。
- ・今後の天候によって、生育ステージは変動することがあるので、ほ場で幼穂長を確認し、生育ステージを把握しておくことが重要である。

3 今後の管理

(1) 出穂後の水管理

- ・登熟初期に高温に遭遇すると、高温登熟によって白未熟粒等が発生して玄米の品質が低下する恐れがある。これを防ぐため、以下に示すような水管理によって、**可能な限り根の活力維持や子実への転流促進を図る。**

① 保水管理

湛水することなく、走水等により土壌を湿潤状態に保つ「保水管理」を行うことで、掛流し（通水）ほどの効果は得られないが、湛水状態よりは乳白粒・胴割粒の発生が軽減できる。

② 昼間深水・夜間落水管理

晴天の高温時には昼間に深水管理とし、夜間は逆に落水管理とする方法である。日が差して地温が上がる午前9時～10時頃に灌水し、気温が水温より低下し始める午後4時頃に落水する。

③ 掛流し灌漑

高温時における最も有効な水管理である。気温より温度の低い用水を掛け流すことで、地温の上昇を抑えることができる。ただし、十分に用水を確保できる場合に限られる。

- ・今後の1か月予報では、気温の低い確率は20%であるが、幼穂形成期から減数分裂期にかけて日平均気温20℃以下、または日最低気温17℃以下が続く場合は、深水管理を行い、幼穂を保護する。

○幼穂形成期（幼穂長1～2mm）：幼穂の伸長にあわせ段階的に水深を5～10cm程度とする。

○減数分裂期（幼穂長3～12cm）：可能な限りの深水管理を実施する（水深20cmが望ましい）

(2) 病虫害防除【宮城県病虫害防除所ホームページより】

① いもち病

- ・7月15日以降、下記のように「葉いもち」の感染好適条件（●が感染好適条件）が県内各地で出現している。
- ・**7/19 現在、予防防除を実施していない「直播栽培」等の水田において「葉いもち」が確認された地点がある。**ほ場をよく見回り、発生が見られた際は速やかに茎葉散布剤等で防除する。

日付	駒ノ湯	気仙沼	川渡	築館	米山	志津川	古川	桃生	大衡	鹿島台	東松島	石巻	女川	新川	塩釜	仙台	白石	蔵王	亘理	丸森
7/12	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/13	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—
7/14	△	—	●	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/15	○	—	△	●	—	—	△	●	●	●	—	—	●	●	●	●	●	●	●	●
7/16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/17	△	●	●	△	—	△	●	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	●	—	—
7/18	○	—	●	●	●	●	●	—	—	—	●	●	—	●	●	●	●	●	●	●

② 紋枯病

- ・病虫害防除所の「発生予報第4号」によれば、本年の発生量は「平年並み」と推測される。
- ・高温多湿条件で発生が助長される。水田を見回り、穂ばらみ期の発病株率で10～18%（ひとめぼれ）程度が要防除の判断基準となる【宮城県 普及に移す技術 第90号より】。

表1 防除要否の判断基準（被害確率50%で設定）

被害許容水準	穂ばらみ期発病株率		
	ひとめぼれ	ササニシキ	コシヒカリ
収量5%以上減収	18%	10%	29%
収量3%以上減収	12%	9%	18%
収量1%以上減収	10%	3%	14%
白未熟粒3%以上増加	67%	28%	51%
白未熟粒1%以上増加	11%	-	12%

③ 斑点米カメムシ対策

- ・本年の出穂期は、概ね平年並みと予想される。早生品種で田植が早かった水田では、間もなく出穂期に達すると思われるので、早めに防除計画を立て、実施する。
- ・本県における斑点米の原因となるカメムシ類で、最も優先して発生するのは「アサスジカスミカメ」である。本種の**防除適期は**、水稻の**穂揃期(1回目)**とその**7～10日後(2回目)**が基本である。**しかし、水田内で「イヌホタルイ」が多発しているほ場では、1回目の散布時期を「出穂始め～穂揃期」に早めることで、高い防除効果が得られる【下図参照 宮城県 普及に移す技術 第83号より】。ただし、「穂揃期後7～10日後」に行う2回目の薬剤散布を省略しないことが重要である。**

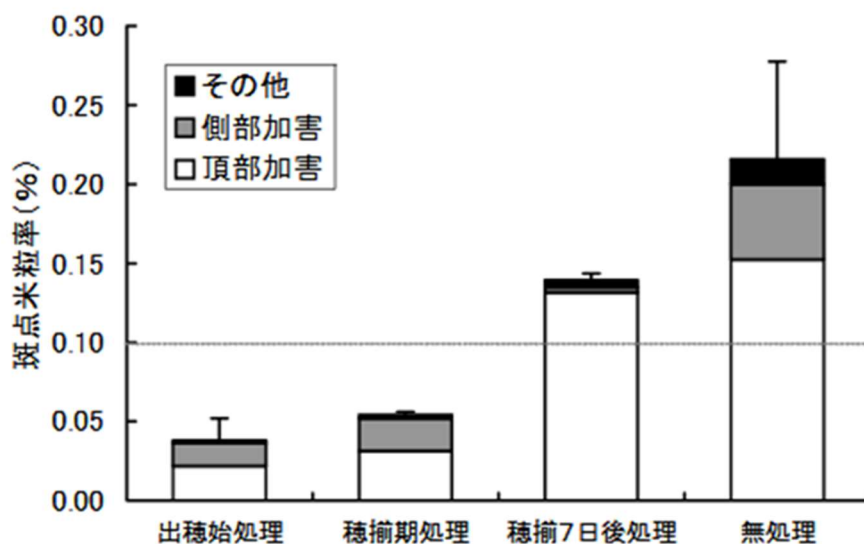


図1 イヌホタルイ発生水田における防除時期と斑点米粒率の関係(平成19年)

注1) 精玄米(1.8mm以上)における斑点米粒率(2反復の平均)

注2) 図中のバーは斑点米粒率合計値の標準誤差を示す。

④ イネツトムシ（イチモンジセセリ）

幼虫期に葉を食害する。直播栽培においては、時に多発して大きな被害をもたらすことがある。防除適期は、第2世代の若齢幼虫が発生盛期を迎える7月下旬から8月上旬とされている。水田を見回り、発生が多い場合には防除を実施する。

4 緊急情報 7/15～16の大雨に伴う技術対策【宮城県農業振興課 HP より抜粋】

- ・宮城県では前線や暖かく湿った空気の影響により、7月15日から16日にかけて大雨となり、浸水や冠水が発生した地域がある。また、今後も降雨が予想されていることから、身の安全を確保したうえで、農作物に対する技術対策を実施する。

◆技術対策(水稲関係)

- ・浸冠水した水田では、排水溝や側溝等に詰まったゴミを除去し早期の排水に努める。
- ・浸冠水した水稲は体内の水分を失いやすい状態になっているので、急激な落水は避ける。
- ・生育が遅れ、葉色が濃くなった場合は、いもち病が発生しやすくなるので、ほ場を観察し、発生を確認したら直ちに防除に努める。
- ・浸水によって生育が遅れた場合、「イネツトムシ」が多発する可能性があるため、ほ場を観察し、農薬散布等による防除に努める。
- ・「黄化萎縮病」が発生した水田では「いもち病」が発生しやすいので、ほ場を観察し、防除に努める。
- ・「白葉枯病」は低湿地で発生しやすく暴風雨で発病を助長するので、ほ場を観察し、防除に努める。
- ・生育が遅れて葉色が期待値より濃くなった場合は、追肥を見合わせる。
- ・生育時期別の冠水日数と減収歩合は、下表のとおりである。

表1 水稲における生育時期別の冠水日数と減収歩合（％）

被害時生育段階	冠水日数（日）				備考
	1	3	5	7	
幼穂形成期	—	30	60	70	幼穂枯死が多い
出穂期前13日	25	80(70)	90(70)	100(70)	二段穂を生ず それが稔実すれば補償が見られる。
出穂期前10日	75	100(70)	100(70)	100(80)	
出穂期前7日	40	80	95(85)	100(95)	

農林省統計調査部 農林17号 () 内：二段穂が稔実した場合

「農業災害ハンドブック（農作物気象災害技術対策指針）」平成2年3月 宮城県農政部より抜粋